

井戸掘りと現地調査

鈴木 均

- I ヴェルザネの井戸掘り
- II イラン革命とルースター・シャフルの形成
- III 現地調査における偶然と必然

最近イランの農村部小都市（ルースター・シャフル）の現地調査の合い間に、井戸掘りの現場を見学した。場所はイラン中央部のヴェルザネ、旅行者もほとんど訪れることのない小さな田舎町である。最初に少しヴェルザネの町について紹介しておこう。

I ヴェルザネの井戸掘り

ヴェルザネはエスファハーンの西方100余キロ、ザーヤンデルードの最下流に位置する^(注1)。ザーヤンデルードはエスファハーンを都城としたサファヴィー朝の栄華を育んだイラン最大級の偉大な川であるが、西から東へと流れるその末端は海に流れ込むのではなく、砂漠の中に消えてしまう。ヴェルザネから数10キロのところにある「ガーヴフーニー」と名付けられた一帯は、ザーヤンデルードの水量の多いときは広大な湿原地帯であり、かつては

近隣の農民が牛を放牧して肥えさせたことからこの名がついたという。

ヴェルザネはまた同時にエスファハーン、ナーイーン、ヤズドの中継地点に位置するその地理的立地条件から、古くから交通の要衝としても発展してきた。町のモスク（マスジェデ・ジャーメエ、ティームール朝の時代に建設された）の前にはキャラヴァンサラーの跡があり、その貯水槽（アーブアンバル）は今でもモスクの隣にある。またこれとは別に、通称ラーボッド^(注2)と呼ばれるサファヴィー朝のシャー・アッバース時代のキャラヴァンサラー跡も町内にある。これらの自然条件（特に水の豊富さ）、地理上の条件から、ヴェルザネは歴史的に古くからこの地域においてある程度中心的・都市的な性格を備えつつ発展してきたということができる。

ヴェルザネは現在人口約1万1000、1986年の人口センサス時には7900人だった。イランの他の都市と同様、革命後に急激な人口増加を経験している。この人口増加は市長や市会議員の話によると、移住によるものではなく自然増が主であるという。エスファハーンから100キロ余り離れたこの地域で、ヴェルザネは突出して人口規模が大きい。それだけに周辺の農村からある程度の人口の流入があった

としても、それは人口の全体的な増加にはさほどの影響を与えないのかもしれない^(注3)。

ヴァルザネという町の名前は、ある意味でこの古い町の特徴をよく表わしている。一説によると「ヴァルザネ」の「ヴァルズ」はケシャーヴァルズ、つまり農民という意味を表わしているというのだ。事実この「町」は現在では人口1万1000近くを数えながらその主たる産業は農業であり、それ以外に町の経済を支えているのは「ナーイーン産」として市場に出る絨緞の織り子(女性の家内労働)による収入がある程度で、近隣に鉱工業施設などはない^(注4)。

ヴァルザネはつい数十年前までは城壁(ガルエ)に囲まれたありふれた農村のひとつだったという。その景観が激変したのはせいぜいここ30年来のことだ。このような変化も近年のイランではある意味でありふれている。イランの農村部は1970年代以降人口が急増するとともに革命後のジャハード・サーザンデギー(農村建設隊)の活動で生活水準が向上、かつてのガルエ内での生活を捨て、その外側に人口が溢れ出した農村は数知れない。

ただしヴァルザネは現在行政的には町(シャフル)であり、人口1万人という立派な町の規模を備えている。それでもその経済的な基盤は農業であり、農村的な文化が町の根幹を成しているのだ。ヴァルザネはこれからも人口が増えつつけるであろう。とくに現在ヤズド方面およびナーイーン方面への道路を整備中であり、これのアスファルト化が完成すれば、将来的にはエスファハーンへの中継地点として商業人口が増加し、人口の流動化が進むことが予想される。

この町は上述のように、イランの最も主要



ヴァルザネの井戸掘り風景

な河川のひとつであるザーヤンデルードが砂漠に消える最末端に位置する。ザーヤンデルードは今年極度の水不足のためエスファハーン市内でついに川が完全に干上がり、干害の激しさを印象付けた。だがザーヤンデルードはエスファハーンを過ぎてからも伏流水となって地下の砂礫層を水が流れており、エスファハーンより下流に大きな支流はないにもかかわらず、最下流のガーヴフーニー付近では再び水流が認められるのである。この川がザーヤンデルード、すなわち「生を育む川」と呼ばれてきたのもこのような水量の多さと周辺地帯の農業に対する絶対的な影響力を指してのことであっただろう。

今年の3月19日(イランの正月ノウルーズの2日前)にエスファハーン周辺調査でヴァルザネに一時泊した翌日、お世話になった市会議員のB氏に「井戸掘りを見学に行かないか」と誘われた。予定していた市長へのインタビューを済ませ、車で町から数キロエスファハーン寄りの農地に行ってみた。

イランの井戸は、深度によって2種類ある。(1)深さ40メートル程度までのチャーヘ・サトヒー(浅井戸)、(2)深さ40メートル以上200メー

トルまでのチャーヘ・アミーグ（深井戸、深さ80メートル程度までの井戸をチャーヘ・ニームアミーグということもある）。今回見学した井戸は深さ10メートル程度のチャーヘ・サトヒーで、伝統的な人力による工法で井戸を掘っていた。ヴァルザネ周辺は地下をザーヤンデルードの伏流水が流れており、その水を利用するための浅井戸が主なので、簡単な道具と人力による伝統的な井戸掘りが現在でも広く行われているものと思われる。

農地のなかに一段低く足場を作り、3本の木でやぐらを組んでいる。足場の真ん中に井戸の位置を決め、鉄製のマッテ（一般には錐、ドリルの意味）と呼ばれる道具に鉄の取っ手（ダステ）を噛ませ、6人から8人程度の男たちがそれに取りついて掛け声とともにマッテを回転させ、地中深く食い込ませていく。マッテに上から力を加えるためにダステに人が乗ることもある。

マッテには大・中・小とあり、それぞれ直径12インチ、10インチ、8インチとなってい



井戸掘りに使用するマッテ

る。この日は土質が柔らかいので大型のマッテを使用し、深さが6メートルを超えたところでマッテの柄を継ぎ足した。マッテは底部が歯になった筒のようなかたちの道具で、土を掻いて筒に溜める。その土を掻き出すために、マッテの柄には鉄製のロープが括り付けられて近くに設置した定滑車（チャルフ）を3～4人で廻してロープを巻き取る。これももちろん人力である。

これらのマッテの柄や定滑車、ロープにしても、以前は木や普通のロープが用いられていたため、今よりもずっと破損しやすかったらしい。だが現在でもマッテは何回か使用すると歯が欠けてくるため修理が必要になる。これらの道具は井戸掘り（チャーフキャン）の業者が所有しており、日当払い（15万リヤル／日）で貸し出すのである。

今回の井戸掘りは、地主から新しく農地を購入したA・バーゲリー氏が農業用水を確保するために計画したもので、親戚の男たちが総出で井戸掘り作業を手伝う。井戸掘りは朝8時頃から夕方まで続けられ、水が出なければ翌日は別の場所を掘るのだという。この日は3日目で、昼近くになって砂礫層にぶつかり、土が次第に湿り気を帯びてきた。やがてマッテの中の土は水を大量に含んだ泥水状になる。この段階ではマッテに鉄の仕切り盤を取り付け、土が流れ出さないようにする。

この日は幸運にも井戸掘りで水の出るところまでを見学することができたわけだが、井戸掘り業者の話によると、井戸を掘る場所が数メートル違うだけで水が出たり出なかったりするらしい。だが井戸掘り業者は日当で収入を得るので、水が出ても出なくても収入は同じだそうだ。そうすると逆に水がなかなか

出ない方が業者にとっては都合が良い場合もあるだろう。その業者は自分では施工主にここを掘るべきだというような提案は決してしないそうだ。

この井戸掘りの様子を見ていて、ふと気付いたことがある。それは自分が現在すすめているイランの農村部小都市（ルースター-シャフル）についての現地調査が、この井戸掘りと案外似ているところがあるのではないかということだ。それを納得してもらうためには今回の調査の主旨や計画から説明を始めなければならないだろう。

Ⅱ イラン革命とルースター-シャフルの形成

イランの伝統的な社会構造は、しばしば都市社会と農村社会の分裂、依存、ないし対立関係として語られてきた。都市（シャフル）には政治的支配者、商人、地主、職人などが居住し、華やかな文化を形作るのにたいし、農民とその手代、土地無し農民らの住む農村（ルースター）は都市の支配を受け、都市から収奪される存在であった。

このように矛盾を孕みつつもイランの都市・農村間の関係はある意味で長い年月安定した状態が続いていた。第1表および第2表から明らかなように、1956年のイラン最初の全国人口統計（全人口1895万4704）においてはイランの都市（シャフル）と農村（ルースター）は人口5000人を境として截然と分けられていた。そしてこの時代の「都市」の定義はきわめて明確に「人口5000人以上の居住地」という一言ですんでいた。人口2000人以上の人口

規模の大きな農村は確かに存在したが、その数は農村全体の1%に満たず、また人口規模の極端に小さな「都市」というものは存在しなかった。因みに後述するような人口2000から2万の範囲には、581の農村／都市が存在していた。

このような安定したイランの都市・農村間の関係は、1979年のイラン革命直前の人口の流動化が始まったとされる段階においてもある程度維持されていた。1976年の人口統計センサス（全人口3370万8744）は、革命の直前に当たったためセンサス結果の集計が不十分で

第1表 1956年センサスにおける「村落」数

人口規模	村落数	百分率
1-2,000人	48,609	99.03%
2,000-5,000人	445	0.97%
5,000-20,000人	0	0.00%
20,000人以上	0	0.00%
合 計	49,054	100.00%

（出所） Vezārat-e keshvar-e Īrān, *Gozāresh-e kholāse-ye sarshomāri-ye omūmi-ye keshvar dar sāl-e 1335*, jeld-e avval（イラン内務省『1335年統計センサス概要』第1巻）より作成。

第2表 1956年センサスにおける「都市」数

人口規模	都市数	百分率
1-2,000人	0	0.0%
2,000-5,000人	0	0.0%
5,000-20,000人	136	73.1%
20,000人以上	50	26.9%
合 計	186	100.0%

（出所） 第1表に同じ。

第3表 1976年センサスにおける「都市」数

人口規模	都市数	百分率
1-2,000人	0	0.0%
2,000-5,000人	6	1.6%
5,000-20,000人	260	69.7%
20,000人以上	107	28.7%
合 計	373	100.0%

（出所） Markaz-e āmāri-ye Īrān, *Sarshomāri-ye omūmi-ye nofūs va maskan, 1355*, *Kolle keshvar*（旧イラン統計センター『1976年統計センサス結果・全国』）より作成。

あるが、それでも第3表のように都市（シャフル）の人口規模については容易に捉えることができる。これを見ると、全人口の増大に伴ってとくに都市部への人口集中が生じ、都市数が20年前の186から373へと倍増していることが読み取れる。だがこの時代には小都市の形成よりもむしろ人口2万人以上の比較的大規模な都市数の増大の方が顕著であり、その割合は1956年の26.88%から28.69%へと微増している。ちなみにこの時期「都市」の統計センサス上の定義は「人口5000人以上の居住地ないしは郡（シャフレスターン）の中心地」とされ、人口規模による区分は絶対的ではなくなった。同時に人口5000人以下の「都市」（すべて2000人以上）が6カ所出現している。

イランは1978年から1979年に「イスラーム革命」の政治的な大変動を経験した。この革命自体は多くの研究者が指摘するように「都市の」革命であって、中国革命のような農村部からの革命ではなかった。だが革命後ホメイニーは復興聖戦隊（ジャハード・サーザンデギー）を創設し、革命精神に燃える若者を農村部に「下放」した。1979年6月16日の演説でホメイニーは「ジャハード・サーザンデギー」の構想に初めて言及し、こう語っている。「……だから我々は『ジャハード・サーザンデギー』というものを命名する、このジャハーを『復興』のための『聖戦隊』としてすべての国民諸階層が、男も女も、老いも若きも、大学人も学生も、技術者も専門家も、都市民も村落民も共に手を携えて協力し合い、荒廃しきったイランを復興しなければならない。最も優先されるべきは当然ながら最も荒廃した場所である農村や遊牧民の居住地、遠隔地の農村など、およそ集団でやって来ては電気

がない、家がない、水がない、舗装道路がない、衛生状態が悪いと、窮状を訴えてくるような場所である。これらの訴えはすべて事実なのであり、それはイランがこんなにも荒廃しているという証しなのである。このような障害が神のご加護により取り除かれた今や、第2の段階である復興の段階として、我々は国民の前に両腕を広げ、すべての国民がこの運動に参加し、共に手を携えてこの聖戦隊『ジャハード・サーザンデギー』を創設し、国民があらゆる所の政府官吏と協力し合い、専門家や官吏、どこにでもいる僧侶（ルーハーニー）の指導の下に事業を展開することを望むものである。」^{（註5）}

このような理想主義に燃えた復興聖戦隊の活動は、その後8年間に及んだイラン・イラク戦争の期間中を含めて営々と続けられた。彼らの活動の目指したところは、ホメイニーの言葉にあるように農村部の復興と社会的・経済的な自立であり、いわば農村が都市に依存しない自給的な状態を達成することであった。そのために復興聖戦隊はイラン全国の農村に電気を引き、舗装道路を建設し、井戸を掘り、保健所を作り、学校を作った。だが同時にホメイニーはイラクとの戦争にのめり込んでいくなかで国力増強のための「子沢山政策」を展開する。

これは長期化の様相を見せはじめた戦争に対処し長期的に兵員を増強するため、避妊行為が宗教法的に問題ありとする解釈を示したもので、革命以前の国王による少子化政策を真っ向から否定するものであった。このような子沢山政策が戦争末期まで続いた影響で、イランではある時期10人以上も子供のいる家庭が珍しくなくなり、家計を圧迫するだけで

第4表 1986年センサスにおける「村落」数

人口規模	村落数	百分率
1-2,000人	63,850	97.70%
2,000-5,000人	1305	2.00%
5,000人以上	149	0.30%
合 計	65,349	100.00%

(出所) 第3表に同じ。

なく社会全体にとって大きな問題となった。現在ではこの政策が将来的に問題を引き起こすことが自覚され、再び人口抑制政策に転じているが、戦争中の爆発的人口増加の(多くの場合負の)遺産は、現在でもイラン全国いたるところで観察されるのである。

革命後の農村部も含めた全国的な若年人口の増大、これに復興聖戦隊の献身的な努力による電気や道路網の整備が加わったとき、イランの地方社会はどのように変容していっただろうか。今となってみれば、その結果は明らかである。テレビやラジオを通じて全国的に都市の情報が行き渡るなかで、人々はより快適な生活を求め、農村人口は急激に流動化していく。その結果イランでは現在大都市への人口集中と同時に、全国いたる所の農村部において「農村でもなければ都市でもない」新たな小都市(ルースター-シャフル)の形成がみられるのである。これをとりあえず人口規模の観点からのみ、革命後の人口統計センサスのうえで見てみよう。

第4表および第5表は革命後7年を経た1986年の人口統計センサス(全人口4944万5010)から作成したものである。これを1976年のセンサス結果と比べてみると、二つの傾向が明らかになる。ひとつは大都市への人口集中の加速化であり、もうひとつは人口2000～2万という範囲を区切ってみた場合の、この部分の比重の増加である。それと同時に顕

第5表 1986年センサスにおける「都市」数

人口規模	都市数	百分率
1-2,000人	8	1.6%
2,000-5,000人	64	12.9%
5,000-20,000人	225	45.4%
20,000人以上	187	37.7%
合 計	496*	

* 人口100人以下と記載されている三つの「都市」は常識的に判断して除外した。また人口不詳の都市が9カ所ある。これらの多くは戦争の前線地域である。

(出所) Markaz-e âmār-e Irân, *Sarshomâri-ye omûmî-ye nofûs va maskan, 1365, Farhang-e rûstâ'î* (イラン統計センター『1986年統計センサス結果・農村総覧』)より作成。

著になってきた傾向として、「都市」と「農村」という範疇の越境化、曖昧化ということが指摘できる。人口2000以下の「都市」が8カ所登場し、人口2000～5000規模の「都市」にいたっては64カ所もある。一方「農村」の側でも、人口5000以上の「農村」が234カ所あり、そのうち10カ村は人口2万を超える。これは人口規模からいえばすでに立派な「都市」の範疇に入る。この人口センサスの段階で「都市」(シャフル)の定義から人口規模の部分は消え、単に「市庁(シャフルダリー)の所在するところがシャフルである」という行政的側面からの便宜的規定に変わっている。

これらの革命後の新しい傾向は、1996年の最新の人口センサスにおいてより鮮明になる。第6表および第7表は、1986年のセンサスで明らかになった傾向がこの10年間でさらに顕在化してきたことを物語っている。人口2万以上の都市の数が187から242に増えている一方で、人口2万以下の「都市」数も各人口規模で増加している。人口2万以下の「都市」数全体では10年間で297から370に増えているのである。その一方で「農村」の側においても、2000人以上の人口を抱える大規模な農村は1499から1727へと増加している。これらを

併せたのが第8表であるが、これを見ると現在人口規模からルースター-シャフル（農村部小都市）の範疇に入るべき農村／都市の数は2074を数えること、さらにこれを居住者数でみると、イランの全人口の15.62%がこのルースター-シャフルに居住しているということになるのである。因みに現在テヘランの居住者数が全人口に占める割合は11.25%である。既述のような「農村と都市の中間的形態」としてのルースター-シャフル（農村部小都市）はこの人口2000～2万という範囲に存在しているのではないか、というのが筆者の今回の調査研究における第1の作業仮説である。

以上1956年から1996年までの40年間に人口2000～2万の農村／都市の数が581から2074

に激増していること、またこの変化は特に最近20年間に於いて顕著であることが指摘された。だが同時に明らかになったことは、1956年段階のイランにおいては都市と農村の区分は未だ明確であり、「ルースター-シャフル」という中間段階を想定する必要もなかった。それが1996年段階になると都市と農村の境界がますます曖昧化してきており、またこの中間的な部分がイラン社会に占める割合も年々肥大化しつつあるのである。それゆえこの40年間（特に革命後の20年間）の変化は、581→2074という数字が示す以上に重大かつ深刻なものであったと結論するべきであろう。この社会変化を一言でいえば「革命イランにおけるルースター-シャフルの形成」ということになる。

なお人口統計結果を材料にした以上の考察において、現実には様々な制約が存在していることは筆者も認識している。例えば1956年の第1回センサス結果はイラン最初の全国的統計調査であったこともあり、遊牧民的な夏营地（イエイラグ）と冬营地（ゲシュラグ）を重複して集計してしまうなど多くの誤差を含んでいる。また1996年の最新のセンサス結果の「村落」には、工業団地、軍の駐营地、イラン・イラク戦争時の難民キャンプなど通常の「村落」の範疇に入れ難い居住区が多数含まれている。だが人口動態の長期的な把握のためには過去の不十分なデータを使用することも止むを得ないことであり、また上述のような傾向の存在自体は大方

第6表 1996年センサスにおける「村落」数と居住者数

人口規模	村落数	百分率	村落居住者数	百分率
1-2,000人	66,395	97.46%	16,648,060	72.30%
2,000-5,000人	1,493	2.19%	4,315,859	18.74%
5,000-20,000人	224	0.32%	1,723,626	7.48%
20,000人以上	10	0.01%	338,748	1.47%
合 計	68,122	100.00%	23,026,293	100.00%

（出所）イラン統計センター（Markaz-e āmār-e Īrān）の集計による。

第7表 1996年センサスにおける「都市」数と居住者数

人口規模	都市数	百分率	都市居住者数	百分率
1-2,000人	13	2.21%	15,315	0.04%
2,000-5,000人	70	11.43%	270,391	0.73%
5,000-20,000人	287	46.89%	3,039,008	8.25%
20,000人以上	242	39.56%	33,493,075	90.98%
合 計	612	100.00%	36,817,789	100.00%

（出所）イラン統計センターの集計による。

第8表 1996年センサスにおける都市・村落数と居住者数

人口規模	都市・村落数	百分率	居住者数	百分率
1-2,000人	66,408	96.62%	16,663,375	27.84%
2,000-5,000人	1,563	2.27%	4,586,250	7.66%
5,000-20,000人	511	0.74%	4,762,634	7.96%
20,000人以上	252	0.37%	33,831,823	56.54%
合 計	68,734	100.00%	59,844,082	100.00%

（出所）第6表および第7表より作成。

において誤っていないものと考えている。

Ⅲ 現地調査における偶然と必然

さて既に述べたように、人口の増加に伴う大都市への人口集中は革命以前から見られた傾向であり、また第三世界において普遍的に観察される都市化現象の一断面でもあろう。このような傾向は一面で「地方出身者の大都市への流入とそれに伴う都市文明の農村化」という問題を孕んでいるのであり、その意味では筆者が現在関心を向けている「ルースター-シャフル」の問題とも密接に繋がる問題であるといえる。

だがもう一方の「農村部小都市の形成・増大」という傾向は、1979年のイラン革命とその後の農村政策に密接に結びついており、その農村振興政策と子沢山政策の必然的な（だが当初は予期されなかった）結果であるといえることができる。その意味ではイラン革命をその社会的な影響において考察しようとするとき、「ルースター-シャフルの形成」の問題は避けて通れない主要な研究課題であると考えられる。

また上述の大都市への人口集中にしても、イランにおいては農村部人口の流動化とルースター-シャフルの形成によって下支えされている。別言すれば革命後の20年間で流動化した農村部のとくに若年層が小地域的な中心^(注6)であるルースター-シャフルに滞留し、ルースター-シャフルを足掛かりにしてさらに大都市へと流入してくる傾向は今後ますます増大することが危惧されるのである。

以上のような現状認識のもとに、筆者はイ



一堂に会した村会議員の面々。ハメダーン近郊

ラン全国に散らばるルースター-シャフル（農村部小都市）のなかからこれまで140余りの場所を訪れ、ビデオカメラを廻しつつインタビューを中心とした現地調査を重ねてきた。ルースター-シャフルは大都市の近郊にあることもあり、ある程度遠隔の地に孤立して立地することもある。最初に触れたヴェルザネなどは後者の例である。古い歴史を持つ所もあれば、できてから30年ほどという所もある。

このようにして話を聴いていくと町を取り巻いている事情はじつに様々なのであるが、その景観はどこでもよく似ている。かつて乾燥地域の農村の典型的な風景であった土壁の城砦（ガルエ）はすでにその機能を失い、とくに人口の急増したルースター-シャフルにおいてはほとんどの場合城壁の跡形もない。多くの場合住民はより都会的な生活を志向し、そのために家屋は日干し煉瓦（ヘシュト）でなく焼いた煉瓦（アージョル）を用いてごっぴりとした（平屋の）家を建てることが多い。町内の道路も幹線はアスファルトが敷かれており、かつてのように農村内の道路は泥道ということもなくなりつつある。町には電

気、水道管が引かれ、最近はガス管を敷設している町も少なくない。要するにどこも同じような田舎の小さな町という佇まいになりつつあり、典型的な農村の景観はどこでも失われつつあるのである。

ここまできてやっと話が井戸掘りとの比較のところに戻ってきた。筆者は一見どこでも似たような風景のルースター-シャフルをこの1年以上かけて歩き回ってきたわけだが、それはこれといって手掛かりのない農地の何か所かに試験的に井戸掘りの穴を掘るのとはほとんど変わらない作業であったのではないかと思ったというわけなのである。どこでも最初の手掛かりは人口センサスを基に作成した「ルースター-シャフル」の一覧表だけで、それを地図と照らし合わせながら幾つかの町を任意を選んで訪れるのである。イラン全国で2000カ所以上あるルースター-シャフルを網羅的に全て訪れることは、時間的にも初めから無理な相談であり、またそうする意味もほとんどないと思われた。

短時間だけ町を訪れて、たまたま遭遇した人物に話を聴いただけでその町のことが分かるものかという反論がすぐにありそうだが、今回の調査には実はもうひとつの背景／仕掛けがある。それは2年ほど前の1999年2月26日に革命憲法に則ってイラン近代史上初めて実施された地方議会の一斉選挙が大きく関係している。この選挙の結果、各都市／農村では人口規模に応じて決められた数の議員（オズヴェ・ショウラーイエ・エスラーミー）が住民の直接投票で選ばれた^(注7)。ここでいうルースター-シャフルの規模（人口2000から2万）の場合、5人である。現在では彼らが町の代表なのであり、また多くの場合彼ら自身

がそのことを自覚している。なお都市（シャフル）の場合は必ず市長（シャフルダール）が居るが、彼らも選挙後は議会（ショウラーイエ・エスラーミー）によって任命されている。そこでルースター-シャフルを初めて訪れた場合、何を措いてもまず最初に議員のうちの誰かを探すのである。

これまでの経験則であるが、住民が選挙で魅力的な人物を選び、議会が積極的に活動できているような町は住民の民度も高く、活気があって将来的な発展の希望も大きいようである。反対に若くて活動的な議員が選挙で選ばれず、議員も町に出てしまったりして議会がほとんど活動していないような町は、何か問題があったり住民自身も町に愛着を持ってないようなところが多いように見受けられる。

そういうわけで、筆者にとって「井戸掘りで水を掘り当てる」ということは、調査の第1段階（できるだけ数多くのルースター-シャフルを広域に訪れる予備的調査の段階）において魅力的な人物に遭遇するということと同義であった。もちろんその他に調査のやり易さであるとか対象地の適格性、将来的な継続調査の可能性など様々な要因を加味することにはなったが、第2段階での調査地をいくつか選定する際の最終的な判断材料は、詰まるところ「人物」に帰着するのであった。その意味でヴァルザネは筆者が「水を掘り当てた」町のひとつであり、その「水」であるB氏が案内してくれた井戸掘りの現場で「水が出た」のも、考えてみれば至極当たり前のことだったのである。

（注1） ヴァルザネに関する地誌的な文献としては、以下のものがある。

Ne 'mat-ollāh Malāyeri-ye Varzane, *Monogrāfi-ye shahr-e Varzane*, tābestān, 1379.

この文献は短期の大学課程の卒業論文として書かれたものであるが、ヴァルザネの市長やエマームジョメ（金曜礼拝の導師）も作成に協力しており、現在のところ参照できる唯一のヴァルザネに関する文献といってよい。ヴァルザネの女性が白いヘジャーブを着用するという風俗についての考察もあり、興味深い。

(注2) rebāt, 隊商宿の意。近年では小学校として使用されていたこともある。

(注3) 町のヌーンヴァーイー（パン屋）の証言によると、ヴァルザネの農繁期には周辺農村からの労働力の流入があるという。

(注4) 町の複数の人が「ヴァルザネの就業者の90%以上が農業に従事」と証言している。一方『1996年統計センサス結果・エスファハーン郡』によると、「ヴァルザネの就業者のうち42.29%が農業部門, 38.32%が工業部門, 18.43%がサービス部門……」となっている。(Markaz-e āmār-e Īrān, *Sarshomārī-ye omūmī-ye nofūs va maskan*, 1375, Shahrestān-e Esfahān, ʃ. panjāh o do.)。

この数字的な相違をどう解釈するかであるが、まず町の人の証言は男性のみに限ったものであると考えられる。また別の証言によるとヴァルザネでは近年家庭内の女性の多くがナーイーの業者の委託する絨緞の織り子になって家計を支えており、上記の工業部門というのは殆どがこのような女性

「就労者」によって占められているものと思われる（因みにイランは昨年2000年に厳しい干害に見舞われたが、ヴァルザネが経済的に何とか持ちこたえたのは、この絨緞による収入が大きかったようである）。

このように考えると、町の人の証言を単に誇張とのみ考えるのは誤りであることが理解される。なお同郡の他の町における農業部門の比率は、エスファハーン2.48%, ハサナーバード25.04%, ホウラースカーン21.20%, レフナーン6.40%, クーフパーエ2.90%, ニーカーバード25.91%, ヘランド4.09%となっており、ヴァルザネの同比率が突出していることは明らかである(ibid., ʃ. chehel- panjāh o chahār.)。

(注5) *Emām Khomeinī (s) va Jahād sāzandegī, Mo'assese-ye tanzīm va nashr-e āsār-e Emām Khomeinī (s)*, bahār 1377, ʃ. 10-11.

(注6) ここでいう「小地域」とは、概念的にいえば筆者が以前に作成した「イランの地域的構成の模式図」の第4層以下に該当するであろう。拙著「イランの生態圏と地域的構成」(後藤晃・鈴木均編『中東における中央権力と地域性—イランとエジプト—』アジア経済研究所, 1997年) 31ページ, 図1を参照。

(注7) 筆者はこの地方議会選挙について近く論考を発表する予定である。

(すずき ひとし／在テヘラン海外調査員)